

て清水門から逃げ出した者も一人おり、精神が侵され気が狂った者もいた。

しかし、皇居を守るといふ特殊な任務を持ち、プライドを堅持しての毎日であった。観兵式は昭和十六年から十九年まで四回体験したが、分列行進の演習の時はそろわぬと連隊長に怒られるが、天皇陛下が出られると割箸をそろえたように「抜刀隊」の吹奏に合わせキチンと行進ができた。

特に昭和十九年四月には、万一空襲があつてはと悲壮なまでに、内心戦戦兢兢たるものであった。航空機も動員され無事に終了したとき、我々近歩の兵としても安堵したものである。

昭和十九年十一月二十五日、私も五年兵になるといふとき、凶らずも除隊となる。近衛の定員制は他部隊と異なり厳しいものであり、私たちも進級、任官がそのため遅れた者が多い。そのため志願、他への転属を願った者は、早く下士官になった者もいた。私は任官もしているため召集解除となり、一晚東京に泊まり翌日、飛驒高山へ帰った。ところが、二十九日、東京は

夜間空襲により市街地は焼夷弾により焼失した。これがB29による大々的空襲の第一弾であった。

その後、高山で青年学校、中学校、実業学校の銃剣術（二段）教官をし、後、本土防衛のため、九州川内の第三〇三師団（高師）へ応召、「お前は若いから挺進遊撃隊へ入れ」と命ぜられ、敵上陸せば特攻挺進の任務を受けたが八月十五日終戦となる。しかし、忘れることのできぬことは、近衛連隊除隊の折の芳賀隊長の「また召集が来ると思うが、郷党の模範となつて祖国を復興せよ」という言葉である。この言葉を忘れず今日まで私は守っている。

船舶兵として千島勤務

昭和二十三年樺太留置

長崎県 諸 田 幾 男

大正十三年十一月七日、島原市で漁業を営む家で生まれ、十九年徴集で甲種合格した。父母は健在、長兄

は家業に従事、次兄は私が入営する前、陸軍第十八師団に入営、ビルマで十九年戦死。弟は海軍に志願しました。

私は昭和十九年九月三日、山口県柳井の船舶工兵連隊入営、直ちに北海道岩内町（日本海側）のお寺（四軒）へ分宿、そこを兵舎として教育を受けました。初年兵は久留米師管の福岡・佐賀・長崎三県出身者一八〇人でした。

教育期間は九月～十二月の四カ月でしたが、助教・助手も含め四軒の寺に分かれ、まあ一個班というか、一個小隊というか、そのような編制でした。初年兵の半数近くは漁師でしたので、海と船には慣れたものでしたから舟艇の演習では古兵よりうまい。古兵が「うまいな」と言うので「漁師です」と笑って答えたものでした。

教育が終わって一月二日、釧路から千島のウルップ島（得撫）へ出発、四日の朝上陸しました。我々が千島へ行った後釧路は空襲され、岩内も四軒の寺のうち三軒が火災で焼失ということで我々は運が良かったと

いえましよう。

ウルップへは船舶工兵揚陸隊として行ったのだが、一個中隊五百人そのうち一個小隊が舟艇、三個小隊は一般で橋桁をかけたり、荷揚げをしたりである。晝部隊は輸送が専門である。揚陸隊には軍属はいなかったが、輸送勤務隊には軍属がいました。

ウルップには始めに一個師団いたというが、最後は五千人ぐらいました。北方も最前線は幌筵島で島全体が要塞化して兵力も多かったが、北海道重点となったためウルップの兵力は削減されていたようです。そのためか、我々が上陸して見ると山の中に、重砲弾箱が入ったままになっていました。飛行機は一機あるが模型である。飛行場はあったし、ガソリンはあったので、あるいは補給基地であったでしょうか。

終戦時、重点兵備の最前線シムシム島（占守島）・パラムシル島（幌筵島）の二島へソ連軍は上陸して激戦を展開した。そのため戦車隊は玉砕戦死していったが、ソ連軍は日本軍の反撃のため多くの犠牲を出したといえます。ウルップ島（得撫島）へソ連軍が上陸

したのは終戦後の九月中旬でした。

ソ連軍は、シムムシユ（占守）、パラムシル（幌筵）の戦鬪に犠牲を出したため我が島の進駐兵は割合大人しかつた。両軍の軍使同士が調印し武装解除をしまった。我が島には五千人の兵力と、三年分の武器・弾薬・食糧はあつたといひます。我々舟艇隊には、舟艇十三隻、徴発船三隻があつたから、我が中隊五百人なら単独で内地へ帰れたので「俺の隊だけ帰るか」とも言つた。

島の司令官は旅団長で少将、我が隊は少佐でした。ところが、十月ごろ、主力はソ連軍の命令で、我々だけを残して日本へ帰ることになつたと出航していった。揚陸隊だけなせ残すのだ、とポロポロ涙を流して泣いたものです。「あいつらは北海道へ行くのに我々だけ残るか」と。ソ連はだますのが上手だ。「揚陸隊は三カ月たつたら日本へ還す」と言う。我々は早く帰ろうと一所懸命に働きました。船に入っている間は寝ずにやつたのに三カ月が三年になつた。一所懸命やると、ノルマをだんだんと増やす。もうだまされないように

と、「要領を本文」とした。

ソ連のやり方は最低でした。仕事は、まずソ連兵を船に揚げ、その武器を揚げ、食糧も揚げる。ソ連には物資が無いことがはつきり分かりました。荷揚げた物はドイツの卍印、ソ連製の物資は無い。武器はアメリカ、ソ連は何も無い。なぜこんなのに負けたのかと思ひました。食料では缶詰はアメリカマーク、小麦粉はドイツ、ソ連製はウクライナの乾ブドウぐらいなものでした。

ソ連のやり方は我々の三カ月が三年となつただけでなく、十月、日本に帰れると思つて喜んで出発した主力の人たちは、北海道ではなく樺太の太泊へ行き、結局シベリアへ抑留され強制労働させられました。

ウルップに上陸したソ連人は、我々に「物をよこせ」とは言わぬが、物々交換で時計や何か、私はタバコとの交換で、結局は無くなつてしまいました。我々には煙草の配給が無い。ソ連将校は巻タバコだが兵隊のは屑タバコを紙で巻いて喫うのです。兵隊は若いのが多かつた。看護兵は女性で軍服を着て階級章をつけ

ていました。

我々の生活は日本軍の米を食べ、ソ連兵はパン食と、たまにバター入りのお粥ぐらいです。我々残された揚陸隊の仕事、舟艇の整備や運航の仕事も一段落したようだったのか、二年半後の昭和二十二年春に命令が出た。最初はまた嘘かと思ったが、最初は北海道へ帰すということだったが、やはり嘘で、着いた所は樺太でした。結局は帰る日本兵との交代でした。その日本兵は「あと一年だぞ」と言う。我々は直ぐ帰すと言って一年いたのだと言います。また樺太の厳しいことも聞かされました。ソ連の上官に欠礼したら重営倉入りだ、千島ではそういうことはなく、逆に我々がソ連兵にタバコをせびつたこともありました。

我が隊の建制は樺太では十人とか二十人とか、バラバラにされました。私は小隊長・衛生曹長らと一緒に二十人ぐらいのグループに入ったが、小隊は三つのグループにされました。我々が行った頃の宿舎は俘虜収容所で大泊にありました。街並はチャンとしていて在留邦人もいたが引揚げ中でした。邦人は収容所は一カ

月ぐらいと言われたので、身の回り品は持ったが食糧は無くして苦しくなっていたようでした。我々も食糧は少なかったが、かわいそうな日本人の子供に自分は食わなくても食物を分けてやりました。

我々の樺太での労働は船舶ではなく一般兵並みとなり、伐採もやる、鉄道の雪かき、貨物列車への材木の積込み。北緯五〇度の国境までも行きました。樺太の雪はサラサラで、せつかく雪をかいても風が吹くと飛んで行ってまたやり直しとなる。

食料はノルマで配給、二百グラムとなっていて、高粱なら高粱だけ、粟なら粟だけ、初めは高粱を知らないから赤飯だと思って喜んだがまずくてなかなか食べられない。しかし、「残すと次の日は少なくなるから残さないように」と炊事係の日本兵から注意され、無理しても食べました。収容所は一兵舎に二百人ぐらいいいましたが、二階建てで、寝具の毛布は千島から持っていました。

冬は民家に入って建築とか船大工とか貨車の積み下ろしをやっていたが、復員してから聞いたシベリアの

収容所よりは良かったようです。防寒服は無く、普通の編上靴で冬は冷たい。監視兵は一人だけだったので、我々は「お前は防寒靴だから我々のと取り換えろ、お前はほとんど火にあたっていているばかりではないか」などと、片言や手真似ですが、大体は通じたように、我々の言うことを黙って聞いていてあまり怒りませんでした。ソ連側との交渉は隊長に任すので、隊長はロシア語を勉強したり大変だったでしょう。でも帰る頃には隊長はペラペラとロシア語を話すようになりました。

共産教育は、下士官クラスに一回あったが、その後はなかった。しかし、私より半年遅くシベリアから帰った人たちはソ連の教育を受け「共産党、共産党」と言っていたが、樺太ではそういうことはありませんでした。樺太には約一カ月いましたが、その間病気はあまりしませんでした。樺太より千島の生活は良かった。日本兵の人数は少なく、食料は軍の貯蔵したのがあった。しかし酒はありませんでした。アルコールはメチールだから飲めないので、農村の人がいて、どぶろく

を作って、望郷の気持ちを慰めていた人もいたようです。

千島ではソ連軍のトラックに轢かれて右大腿部を駄目にした人と、肺病で死んだ人がいたが、概して犠牲も少なかつた。我々は樺太を出発し、昭和二十三年十一月二日に函館上陸、故郷の島原へは二日半かかって帰りました。

出発してから音信はできず、家では生きているか、死んでしまったか、どこに行ったのか一切不明でしたが、父は五十五、六歳だったのに、私が帰る前に死んでしまいました。家族は北海道で初めて電報を打ったので安心したようです。その後は家業の漁業を続け現在に至っています。